

## 狩野亨吉と大西克知：生誕150周年記念活動報告

相部，久美子  
九州大学附属図書館医学図書館閲覧係

梶原，瑠衣  
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

山根，泰志  
九州大学附属図書館利用支援課サービス企画係

<https://doi.org/10.15017/1670042>

---

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報。2015/2016，pp.25-37，2016-08。九州大学附属図書館  
バージョン：  
権利関係：

# 狩野亨吉と大西克知 —生誕 150 周年記念活動報告—

相部 久美子<sup>†</sup> 梶原 瑠衣<sup>‡</sup> 山根 泰志<sup>§</sup>

## <抄録>

近年の調査により、附属図書館が設置される大正 11 年 (1922) 以前、九州大学が、近代日本を代表する思想家・教育家・大蔵書家である狩野亨吉から、大量の図書を購入していたことが判明した。平成 27 年 (2015) が狩野亨吉と、その狩野から大量の図書を購入して医学部眼科教室の基盤を築いた大西克知の生誕 150 周年にあたることを記念し、図書館職員を中心として、電子展示や医学図書館での小企画展示を試みた。本稿は、それらの活動を通して得た狩野亨吉と大西克知についての新知見を紹介しつつ、活動の意義を報告するものである。

<キーワード> 狩野亨吉, 大西克知, 桑木彥雄, 桑木文庫, 狩野文庫, 書誌学, 科学史, 医学史, 眼科学, 大学図書館史, 日本眼科学会, 日本眼科学会雑誌

## Kano Kokichi and Onishi Yoshiakira —In Commemoration of their 150th Anniversary— AIBE Kumiko KAJIWARA Rui YAMANE Yasushi

### 1. はじめに

狩野亨吉 (1865~1942) は、近代を代表する思想家・教育家であり、その莫大な蔵書の多くは、東北大学に収められ、狩野文庫として全国的に知られている。近年の調査により、九州大学附属図書館が設置される大正 11 年 (1922) 以前に、その狩野亨吉から、実は九州大学も大量の図書を購入していたことが判明した (大淵・山根 2011)。

平成 27 年 (2015) は、狩野の生誕 150 周年にあたることから、全国各地で関連イベントが開催された (東京大学 2015, 田村 2016, 村上 2016)。九州大学でも、27 年が、狩野だけではなく、その狩野から大量の図書を購入して医学部眼科教室の基盤を築いた大西克知 (1865~1932) の生誕 150 周年にもあたることから、研究開発室「コンテンツの形成および保存に関する調査研究班」(以下、コンテンツ形成班) 参加職員を中心として、電子展示や医学図書館での小企画展示を試みた。本稿は、それらの活動を通して得た狩野亨吉と大西克知についての新知見を紹介しつつ、活動の意義を報告するものである。

### 2. 狩野亨吉と九州大学

#### 2.1. 狩野亨吉について

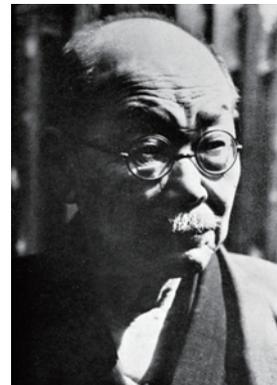


図 1: 狩野亨吉 (安倍 1958)

狩野亨吉は、出羽久保田藩士狩野良知の次男として大館に生まれた。慶応 4 年 (1868) の秋田戦争では南部藩の攻撃により大館城は落城、幼い狩野は母に背負われて津軽藩領まで逃げ落ちるという体験をしている。帝国大学数学科・哲学科を卒業、金沢第四高等中学校教授を勤めた後、親友夏目漱石の招きで熊本第五高等学校に赴任する<sup>1</sup>。明治 31 年 (1898)、第一高等学校校長となり、その校風形成に大きな影響を与えた。39 年

<sup>†</sup> あいべ くみこ

九州大学附属図書館医学図書館閲覧係 E-mail: aibe.kumiko.903@m.kyushu-u.ac.jp

<sup>‡</sup> かじわら るい

九州大学附属図書館図書館企画課企画係 E-mail: kajiwara.rui.351@m.kyushu-u.ac.jp

<sup>§</sup> やまね やすし

九州大学附属図書館利用支援課サービス企画係 E-mail: yamane.yasushi.188@m.kyushu-u.ac.jp

(1906), 京都帝国大学文科大学初代学長に就任, 内藤湖南, 幸田露伴, 西田幾多郎ら正規の学歴がない異端の学者を招き, 京大文学部の基礎を築いた. 辞職後は官途に就かず, 東宮教育掛, 東北帝国大学総長等の推薦を全て辞退, 書画や刀剣の鑑定・売買を業として隠者のような生活を送った. 膨大な書物と春画を蒐集し, 安藤昌益, 志筑忠雄らの埋もれていた思想家を発掘したことや「性」を追求し続けたことでも知られる. 一生独身を通し, 一冊の著作も残さず, 一切の名利を求めない狩野の生き方は, 多くの人に慕われ, 近代日本の精神史に有形無形の影響を与え続けた.

## 2.2. 九州大学所蔵狩野文庫概要<sup>2</sup>

青江舜二郎が『狩野亨吉の生涯』執筆にあたり, 狩野が九州帝国大学に譲渡した図書について, 九州大学に問い合わせたところ, 「もはや人が変わりその後の変化もはげしいので, それに関する資料・記録といったものはまったくくない」(青江 1974, pp. 328-329) という回答を受けたことをやや批判的に書いているように, 少なくとも附属図書館では狩野の蔵書が九州大学に存在することは忘れ去られていた. 近年の調査により, 九州大学が狩野亨吉より購入した図書は, 中央図書館狩野文庫の朝鮮本・人名録・書目類, 中央図書館桑木文庫中の数学天文書, 医学図書館貴重図書室中の眼科教室旧蔵の類書・医書類, 以上三つのコレクションが現在確認されている.

中央図書館狩野文庫は, 大正 12 年 (1923) 10 月本部が大同洋行石主本恵吉を介して購入し (247 部 726 冊), 翌年 12 月, 法文学部に移管され, 昭和 2 年 (1927) に附属図書館に移管されたものである. 受入の中心となった九州大学側の人物は不明だが, 人名録や書目類など, 図書館向きの資料が中心であり, 法文学部 (大正 13 年創設)・附属図書館 (大正 11 年創設, 14 年本館竣工) の蔵書の基盤とする目的であったと考えられる. 附属図書館創設期の主要人物の一人である司書田中鉄三によってその高い価値が見出され<sup>3</sup>, 昭和 3 年 3 月の九州帝国大学創立記念日, 法文学部開学式の展示会「図書館学参考書展覧会」(附属図書館初の展示会) でも主な展示品として多数出品されている<sup>4</sup>. また, 江戸時代の紳士録である武鑑類も, 昭和 10 年度開学記念展示で展示された. 朝鮮本も箱崎の九州帝国大学の近くに在住した朝鮮学者前間恭作 (1868~1942) の著書『朝鮮の板本』(1937) において, 狩野文庫の朝鮮本がいくつか紹介されているが, 田中鉄三と交流があったため (白井 2015), その便宜と教示を受けたものだろう.

田中鉄三など附属図書館創設期の主要人物が昭和 14 年に一斉に附属図書館から去ると, 他の混排された

文庫群 (山根 2008, 同 2009) と同様, 狩野文庫としては忘れられ, 昭和 24 年頃附属図書館において作成された「文庫調査書」には既に見えず, その後の『九州大学附属図書館要覧』の「学内所蔵主要文庫」欄 (2005 年発行まで存在) にも記載されることはなかった. 研究者には蔵書印や『朝鮮の板本』により, 断片的にその存在が認識されていたようである<sup>5</sup>.



図 2 : 田中鉄三  
(青年 1944)



図 3 : 桑木彦雄  
(貴重書庫展示写真)

桑木文庫は, 近代日本を代表する物理学学者であり, 九大理学部<sup>くわきあやお</sup>の基礎を築いた工学部教授桑木彦雄 (1878~1945) が, 工学部数学物理学教室に蒐集した科学史文献を, 理学部移管後に斯く称したものであり, 国内有数の科学史コレクションとして広く知られている. 桑木は狩野亨吉と科学史研究を通じて交流があり, 実業家鮎川義介より資金を得て狩野の蔵書を購入した<sup>6</sup>. 総計 484 部 1229 冊で, 桑木文庫和漢書の 3 分の 1 に相当する.

医学図書館貴重図書室中の眼科教室旧蔵の類書・医書類は, 初代眼科教室教授大西克知が, 大西の義兄で第一高等学校教授菅虎雄 (1864~1943) を介して交流があった狩野より購入したものである. 九州帝国大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学時代である明治 42 年 (1909) から, 大西退官後の昭和 2 年 (1927) まで断続的に購入し, 総計 1506 部 6469 冊に及んだ. 大西の遺族や門下生には, その由来が断片的に語り伝えられていたようだが<sup>7</sup>, 蔵書印など狩野が所有していた痕跡に乏しく, 研究者においてすら, 狩野より購入したものであることは全く知られていなかった.

大西克知は, 日本近代眼科医療の先駆者であり, 眼科教室に最新の設備を整えながら, 一方で当時顧みられていなかった和漢の古医書を蒐集し, 類書や史書等の大部な参考図書類を揃えるなど, 長期的視野に立った極めて優れた見識を持っていたことが窺えるが, 次章ではその人物像に迫ってみたい.



図4：大西克知（大西克尚氏所蔵）

### 3. 大西克知の生涯

#### 3.1. 四国松山時代

大西克知は慶応元年2月2日(1865年1月6日)に、松山藩殿医大西宗節の長女庫子・克育の次男として愛媛県松山に生まれた(大西克尚 2011, p. 1793)。幼少期より聡明で兄の克孝(後の金沢医専内科学初代教授)と同級になったが、弟の克知の方の成績が良かった事があったので、兄がいたたまれず転学のため上京したという竹馬の友である和田昌訓による逸話が残されている(内田 1932, p. 48)。また学問も人に負けないが、喧嘩にも負けないと自負する程の腕白であった(内田 1932, p. 48)。明治40年6月に発行された『福岡医科大学雑誌』創刊号に大西克知は彼自身の少年時代の道楽について記している。先天的に雑誌を作るのが好きで、14.5歳の中学生時代に校内で雑誌を発行し、同士と共に退校を命じられた事があったが、その後も懲りずに同じ道楽仕事に熱中した(大西克知 1907, p. 2)。この道楽が後の『日本眼科学会雑誌』発刊への奮闘と29年間その編集発行を一手に任せた情熱に続いたのだろうか。

#### 3.2. 東京大学予備門時代

故郷で高等科教育を終え、上京し明治14年(1881)11月20日「東京大学医学部医学生」になり、東京大学予備門分費生になった。明治17年、18年には報奨給費金を毎月受給し学業に励んだ。杉浦重剛(教育者・思想家 東京大学予備門校長)の教えを受け杉浦重剛をして「自身の食物を大西に与えるように」と言わしめる程期待されていたようである。また大西克知のモットー「行って悔いなし」は杉浦重剛の直伝ではないかと言われている(内田 1932, p. 48)。後日談がある。大西克知が九州帝国大学医科大学眼科学教室教授として在職していた大正2年(1913)に山川健次郎総長が東大総長に任命された。学生らは留任運動を起し文

部省に請願した。その時に杉浦重剛は九大には大西克知という侃々諤々の点で山川健次郎と似た人物がいるので山川がいなくても九大は大丈夫であると代表を説得したと伝えられている<sup>8</sup>。

大西克知の三男大西克保(九大耳鼻咽喉科出身・開業)の次男大西克尚(九大眼科出身・和歌山県立医科大学名誉教授)が御所蔵の「東京大学予備門分費生徒冬学期試業優劣表 明治17年5月」を見ると、大西克知は学年首席である。その成績は代数学、物理学、画学が100点で平均点は92点である。表には同窓生として宮入慶之助(九州大学寄生虫学教室初代教授)、呉秀三(精神科医、東京帝国大学医科大学教授)、菅虎雄(大西克知義兄、第一高等学校校長)、関場不二彦(外科医・医史学者)、伊藤隼三(京都帝国医科大学教授)という錚錚たる名士の名が連なっている。

宮入慶之助(1865~1946)<sup>9</sup>は東京大学予備門で大西克知と同級生であり、学生寮も同じであった。大西の学生の頃の印象についてこう語っている。大西は同僚生達と夜寮で団欒し、皆の就寝後に遅くまで勉強するので始業時間に毎回遅刻し寝不足の目で着席するなり指名されてもあわてず返答し、クラスの首席であった。大西は詩や文を抜粋・書き集めた物を自分で製本し、そうした冊子を何冊も持っていて多くを誦んじ、朗々と吟朗していた。東京で「大西眼科医院」を開業していた時代に宮入は「内務省衛生局の医務課長」であったが、業務でラテン語記載の外国の卒業証書を読む必要が出来た時は必ず「大西眼科医院」に駆けつけ翻訳を頼んでいた。また兄の克孝とは兄弟仲が良く、中山平次郎(福岡医科大学病理学教室初代教授)・中山森彦(福岡医科大学第2外科2代教授)の兄弟仲に匹敵するくらいであった。(宮入 1932)

#### 3.3. ドイツ留学

明治18年12月大西克知は20歳の時に東京大学予備門を離れドイツ私費留学の道を選んだ。

「兄、大西克孝(後に金沢医専内科学初代教授)等の援助を受け、明治18(1885)年12月18日に横浜港を出港し、翌年1月30日にマルセイユ港に着岸した。同船には帰国後の東大眼科教授が約束されている文部省派遣の6歳年上の河本重次郎、宮下俊吉(自費・[慈恵医大眼科学講座初代教授])等も乗船していた。」(大西克尚 2011, p. 1793)

河本重次郎(東京大学初代眼科学教室教授)はこの船中での出会いが大西克知との初対面だった。その時の驚いた印象を河本はこの様に記した。日本で医科に入学しないで奮然として留学し、中学校から学習し、

その規定に沿って「ギリシャ語」を学び、次に「ラテン語」を学ぶ人は眼科界にはいない。大西が初めてだろう。それでラテン語が堪能であった（河本 1932 36(10), p. 49, 同 1932 36(12), p. 63）。

大西克知は明治 19 年 2 月 20 日にハレ大学に入学し、グレーフェ教授（Karl Alfred Graefe, 『眼科学大系』の著者）の指導を受け理学、医学を学び、明治 21 年 4 月 15 日にチュービンゲン大学に転学しナーゲル教授（Albrecht Eduard Nagel）の指導を受け眼科を専攻した。明治 22 年 10 月 16 日「白色状を呈する網膜炎」の論文で医学博士の学位を取得し、明治 23 年 6 月 26 日帰国した。留学時の大西克知の様子について大西克知の長男の大西克治（北大眼科で学位取得（日本眼科学会 1997, 第 5 巻, p. 315）、同大学で助手、東京同愛盲学校設立者（大西克治 1970）が父克知死去の日に父と交わした会話を記録している。

「私は父に洋行だけは致したい。お若い時勉強しておられた Tübingen には是非参りたい。と申しましたところ、百聞一見にしかず、何時でも行ってこい、健康第一、金銭にけちけちするな。ただし父は三等船客、カラーは紙製、ビール一杯滞独中飲まなかったと申していました。」（大西克治 1966, p. 46）

娘婿の大野六郎（九大眼科教室助教授・開業）は、岳父大西克知からドイツ留学中に経済的に苦労した話を聞いている。

「私費留学生だったので翻訳を恩師杉浦重剛先生に送って学費の補助にするといい苦学振りであったが学成り愈々帰朝に際し親元から送金された金を見てまた研究欲を起して 1 年滞在し今度は本当の金なしになって仕方なしに汽船会社に頼んで貨物賃で、しかも運賃後払いでやっと帰国されたそうで『荷札こそないが生きた荷物だった』と言っておられた。」（福岡日日 1932）

ドイツ留学時に大西克知が現地ハレで購入した図書を医学図書館で所蔵している。それらの頁を開くと書き込みがあり、懸命に学習した姿が想像される。（図 10-12）

明治 19 年 3 月 22 日付けの大西克知がハレ府・カルストラッセ（Karlstraße）の居住地より松山の両親と兄に送った「大西克知航海日記」（図 8）を御所蔵の大西克尚氏にご御許可頂いたので内容の一部を紹介する。日記は大西克知が明治 18（1885）年 12 月 18 日にドイツ留学に向け横浜港を出港し、19 年 2 月 1 日にドイツ国ハレ府に到着するまでに書いた日記の抜粋に、寄港

先の香港での目撃談と、5 枚の絵で構成されている。故郷の家族に 45 日間に及ぶ航海中の出来事を知らせ、安心させるために書いたと最後に記述している。抜粋とは言え日々の体験が詳細に記録されている。人物名は漢字でフルネームで記録し、金額もドイツ通貨の額に値する日本の通貨額を付記している。後日患者のカルテや病床記録を詳細に記録するよう指導した大西克知の几帳面な性格が既にこの日記からも覗える。航海経路を日記で追うと、12 月 18 日に横浜をタナイス号で出港し（出帆前に見送りに来た菅虎雄他 4 人と別れの杯を交わした）、20 日神戸港、26 日香港着、香港でイラウ・アジー号に乗換、29 日香港出港、明治 19 年 1 月 1 日サイゴン港、4 日シンガポール着、5 日シンガポール出港、10 日コロombo港着、17 日アデン港に入る、22 日スエスに達す、24 日ポルトサイド港に着、28 日ウエズフ火山を見、ネアペル港着、30 日マルセイ港着、同行者と別れ夜 11 時 20 分「ジネーフ」指して旅立つ、31 日スイス「ゲンフ」、「バーゼル」通過、2 月 1 日「フランクフルト・アム・マイン」着。

香港入港までは食事の記録が多い。食事は 8 時、10 時、14 時、20 時の 1 日 4 回で、珈琲、赤葡萄酒、アイスクリーム等も出された。1 月 1 日に到着したサイゴン港での見聞が、印象深かったようで記録は長い。稲田に稲が今を盛りと豊り、日本の百姓と同じような百姓が収穫する姿が日本では冬の季節なので時候外れに思う、椰子の葉で葺かれた百姓家は日本の藁葺き小屋の様である、フランス国の港なので、大砲を発して安着を祝う。山羊牛が放飼され、子供が行水しながら泣いている様子、夜の散歩で日本の縁日のように感じ、河辺のそぞろ歩きを楽しみ、螢を捕まえ、虫の音を聞き、一日で春夏秋冬に一時に遭遇するは奇妙、不思議の限りと書いている。

日記は明治 19 年 2 月 1 日 17 時 35 分に最終目的地のハレ府に到着し、長井信吉<sup>10</sup>に案内され「ホテル・スタット・ハンブルヒ（Hotel Stadt Hamburg）」の迎えの馬車に乗りホテル到着、部屋に入り安堵の膝を折り、長い旅路を思い生涯の目的の第一目標を達したと得意の詩文で終わっている。日記を読むと大西克知はこの頃から既に詩に慣れ親しんでいた様である。四国松山時代にその素養は身につけていたのだろうか。大西克知死後の追悼文には旅先の車中や、観光名所（死の 4 ヶ月前に日本眼科学会出席のため訪れた京城の金剛山の山頂、大同江の夕暮れ、北陵の黄瓦の下）で彼が詩吟を詠み、詩文を暗誦する姿が紹介されている（久保 1932, p. 46, 中島 1932）。また九大教授時代には大学への往復（片道約 3 キロ）は電車を待つのを嫌い歩いて通勤したが、歩きながら小声で詩とも歌ともつかない節回しのを謡う姿を人々は目にした（大野 1961

31(4), p. 269).

### 3.4. 岡山時代

明治23年(1890)2月26日に帰国した大西克知は12月12日付で岡山に第三高等中学校教授として赴任した。12月20日には岡山県立岡山病院眼科医長を囑託された。明治24年5月1日に東京大学予備門時代からの友人「菅虎雄」の妹「菅孝代」と東京英語学校長杉浦重剛の媒酌で結婚した(原武1983, p. 40)。岡山での「最も大きな業績は『日本眼科学会雑誌』の前身である『眼科雑誌』の発刊(明治26年7月)である。この『眼科雑誌』第1巻1号1頁には大西教授のトラコーマ手術療法の論文が見られる。」(日本眼科学会1997, 第4巻, p. 259)。『眼科雑誌』は明治29年に第2巻(1-12号)明治29年に第3巻(1-2号)が出版され廃刊した(日本眼科学会1997, 第2巻, pp. 181-182)。

### 3.5. 東京「大西眼科医院」開業と『日本眼科学会雑誌』創刊

明治28年(1895)6月に大西克知は岡山県立眼科医長を辞任し、12月には第三高等学校を退職し、岡山を離れ東京都神田区錦町3丁目1番地に「大西眼科医院」を開業した。「大西眼科医院」を受診した時の様子を「吳建(九州帝国大学第一内科教室第3代教授を経て東京帝国大学教授)」は文章に残している。吳建が一高生の時に強度の近視になり「大西眼科医院」を受診した所「仮性近視」と診断され目薬を点眼し眼を使わなければ治ると言われ冬休み中、新聞雑誌も読まなかった。近視は軽くなり始業の前に眼鏡の処方頼んだら大西先生に学校に行くつもりなら近視はすぐ悪くなり網膜剥離を起こす事になると怒られた。退学しないといけないのかと尋ねると先生は自分は医者だから病気の心配はしてあげるが、学問が出来る出来ないは知らないと言われ吳建は網膜剥離になる事を心配し父親に相談すると学問をしなければ文盲になる。文盲と失明とどちらが良いか、死ぬ時に良い眼を持っていてどうするつもりかの意見に励まされて医者通いをやめて勉強に専念した(吳1982, pp. 71-73)。この様に患者に単刀直入に意見する医者であったが「大西眼科医院」は盛況だった。書生として疋田直太郎(岡山時代の教え子、明治24年第三高等中学校医学部卒業、九大眼科助教授、開業)と吉野一知(九大眼科を経て後に松山で開業・俳人吉野義子の養父)がいた。大西医院の会計法には特徴があった。毎晩大西夫人他3名が新聞紙の袋張(患者が治療費を入れるための袋)をする。院内に諸治療費が掲示してあり患者自身がその表を見て判断し該当する金額を袋に入れ糊付けし備え付けの

箱に入れて帰る。夜その袋を破って計算するシステムだが、その会計法で問題は起こらず大西克知は後に大野六郎が開業する時もその会計法を勧めた。また当時大西克知は火事が生じても書籍原稿が助かるように土蔵の中を書斎にしていた(大野1961 31(4), p. 267)。「日本眼科学会雑誌」編集執筆の仕事はその土蔵の中でしていたのだろう。

明治31年に義兄で友人の菅虎雄が「大西眼科医院」に寄寓した(原武1983)。この時期は狩野亨吉と菅虎雄の交流が頻繁で大西克知との親交が深まったと想像される。

明治32年11月13日大西克知は東京帝国大学から「線状性網膜炎の一実験」で医学博士号を取得した。

大西克知の東京での最大の業績は「日本眼科学会」創設(明治29年12月に「日本眼科学会第1回創立準備会」が開かれ、明治30年2月27日~3月1日「第1回日本眼科学会」開催)と、明治30年4月の『日本眼科学会雑誌』発刊である(谷原2013, p. 1096)。創設までの経緯等については詳細な文献がある(須田1932, p. 51, 越智1966, 大西克尚1997, 同2011, p. 1794, 日本眼科学会1997, 第2巻, pp. 181-182, 谷原2013, pp. 1096-1097)のでこの稿での説明は避ける。第1回の総会の会期決定には議論が続出したが、眼科医が最も暇で寒さが厳しくないという理由で明治30年2月27日が決まった(大西克尚1997, p. 104)。この席で河本重次郎は開会演説したが、日本全体の眼科を総括し団結させようとする大西克知の原動力を讃えている。この時代は生活文化水準が低く交通機関としては電車がなく鉄道の馬車、人力車が走りランプを使用する時代であった(越智1966)。そういう時代の背景を考えると大西克知の奮闘が判る。大西克知は『日本眼科学会雑誌』の創刊号から第29巻まで編集・校正・発行・発送・会計処理を殆ど1人でいしかも毎回前刊の誤字を訂正した(神鳥1966, p. 200)。その苦労を『福岡医科大学雑誌』創刊号に編集者達に対して祝辞として書いている。福岡医科大学に入籍した理由の1に『日本眼科学会雑誌』の好きな編集の仕事を思う存分やりたいからと挙げながら、月刊雑誌の定期刊行の難しさ、それ以上に原稿が集まらない(予定していた原稿が来ない)ため徹夜して新原稿を書く苦しさ、集まった原稿の内容が物足りなく代わりの原稿も無く公務が足枷になり最後の苦策「本月休刊」を選択したいが自身の「責任」がそれを許さない。雑誌の編集は第2の生命と思ひそのために物質的に損をし、社交上の失礼が生じるのは良くないが仕方ない。雑誌の発行者は百・千・万難排して初志貫徹の大決心が必要等、先輩編集者の目線で叱咤激励している(大西克知1907, pp. 2-6)。

## 3.6. 福岡へ

明治38年(1905)1月12日に大森治豊学長に懇望され(大野1961 31(4), p. 267), 大西克知は京都帝国大学福岡医科大学眼科教室初代教授に任ぜられ, さらに明治39年6月20日から明治44年2月まで初代附属医院長大森治豊の後任で医院長の任務を担った(日本眼科学会1997, 第4巻, p. 288). 福岡の地を選んだ理由について大西克知は天災地変が無く子女の教育に環境上良いからと語っている(大西克治1966, p. 43).

京都帝国大学福岡医科大学は明治44年4月1日に九州帝国大学医科大学と改称され大正8年(1919)4月1日に九州帝国大学医学部と改称された. 大正15年5月19日に大西克知は定年制により退職し同年6月29日に名誉教授になった. 大西克知は大正14年1月6日に60才の誕生日を迎えた時に自分の方から退職願を出した. あまりに突然だったので定年制に対して先手を打ったと評されもしたが, 大西自身はただ天命に従ったまでの事と述べ, 定年制について肯定論を記している(大西克知1927).

大西克知の退職に伴い『日本眼科学会雑誌』の編集・発行事務局は九州帝国大学から東京大学に移り, 大西は昭和2年(1927)1月に日本眼科学会会長を辞任した. 大西克知から編集の事務局を引き継いだ時は剰余金がかかりの額備蓄されていたとのことだった(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 238).

退職後は盲人教育の為の点字研究に専念し, 点字用タイプライターを考案, 2種の特許を得, さらに盲人のために廉価な「タイプライター」を普及しようと研究・努力した(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 124). しかし直腸癌を発症し昭和5年九大第一外科で三宅速(初代第一外科教授)に手術を受けた. 第2回目の手術は昭和6年に三宅速が九大を退官後大阪大野外科病院で手術を担当していたので, 大阪で受けた. 昭和7年7月に日本眼科学会総会に出席のため朝鮮に赴いたが滞在中は大西自身で局所の処置(直腸癌, 人口肛門のため)をし, 8月に第3回目の手術を受けた. この時は大阪より三宅速が来福し, 執刀医は赤岩八郎(第2代第一外科教授)だった. 大西克知は病気を周囲に知らせないように命じ, 見舞いを断った. 長男の克治を札幌の赴任地から呼び寄せたのも死の数日前だった(大西克治1966, p. 43). 9月17日自宅にて逝去した. 点字研究は特許を取得したが後もう一步というところで完成に至らず67才の惜しまれる死であった(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 70). 長男の大西克治が昭和15年に「東京同愛盲学校」を設立したのも父の研究の後を継ごうとしたのではないだろうか. 同校は空襲により建物全てが灰に化してしまった(大西克治1970).

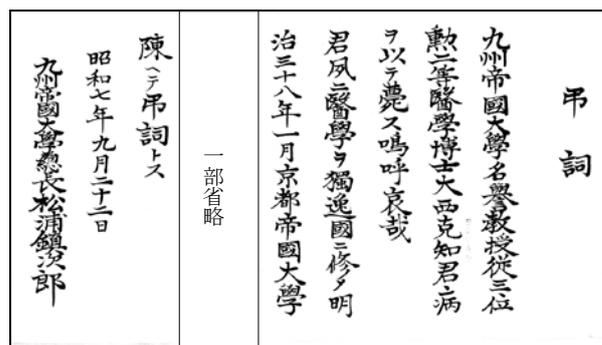


図5: 総長弔詞 (大西克尚氏所蔵)

## 3.7. 日本眼科界・教育への貢献

日本眼科学会が創立百周年を記念して『日本眼科学会百周年記念誌』全7巻を出版した. 膨大な歴史的データが収録されており眼科界の歴史を調査する際に非常に有効な資料である. 大西克知に関して「日本眼科学会創立」, 「日本眼科学会雑誌発刊」の2大偉業以外の様々な功績が記録されている. 第6巻「日本眼科の史料」には『日本眼科学会雑誌』の100年間に発表された著者別発表論文数のランキングがあるが, 大西克知は第2位で原著論文180篇を発表している(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 238). 大西が発案・制作した物には, 粗悪な点眼瓶を改良した手術用点眼瓶がある(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 124). 大正2年(1913)には日本で初めて「大西式柄付検眼レンズ」を考案した(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 70). 明治24年(1891)に『新撰大視力表』第1・第2, 明治26年に『近距離視力表』, 明治43年に『新刊萬国式視力表』を発行した(日本眼科学会1997, 第6巻, p. 9). また九大眼科教室で越智貞見(北海道帝国大学初代眼科教授・三男大西克保の岳父), 牟田直太郎, 大野六郎他多数の優秀な人材を育てた(日本眼科学会1997, 第5巻, p. 315).

大西克知の大学病院での診療は大正14年の火災の際にも「まず入院日誌だけを全部運び出すように, 図書も機械も金で買えるが日誌は買えない. 日誌は自分の仕事の生命である. 毎日の仕事は辞世と同じである」と指示する程診療日誌を大事にし, 日誌の記録について厳しく指導した. 使用する言語は日本語でないとして正確に克明に記録できないと日本語の使用を命じ診断名だけがラテン語で, 軽症患者の記録に際しても患者本人の病歴は元より家族の病歴(眼病以外の全身病歴)の記録が必要で, 初診時は検尿喫煙量の記載も必要であった(内田1932, p. 47, 大野1961 30(6), pp. 403-404, 田原1966, pp. 24-25). それは眼科疾患が全身疾患と密接に関連しているから必要でありその診療姿勢が明治41年の「高安・大西病」と呼ばれるようになった疾患発見に繋がった(大西克尚2011, p. 1795).

大西克知は学生の近視予防対策を研究し文字の省略

法が近視予防に繋がると図書や論文を発表した（大西克知 1897, 同 1924）。学生の近視予防として教科書の漢字の改良を推奨している。画数の多い複雑な漢字は文字を省略し、横線・縦線の視覚と間隔、文字の大きさを学生の机と眼との距離から計測し注釈用の文字の大きさは約 3 号活字とし普通の文字の大きさは約 5 号活字とするべきとし、国語調査会が決定した常用略字は少なすぎるので略字をもっと増やした方が良く、また既存の文字の中に略字に使用できる文字が無い場合は新しく文字を作った方がいいという考えである（大西克知 1924）。

### 3.8. 最後に

大西克知は純粹・直情径行の性格が誤解を招き奇人・変人と様々な逸話が先行しているが、それは自分自身の大事にしている大学での医療や日本眼科学会雑誌編集の仕事等へのこだわり・自己主張がありそれを守るための言動が原因の様に思われる。大学以外での診療行為を一切断ったり大学で購入した官有物を私有物以上に嚴重に取り扱うよう注意したのもその現れだったに違いない。器具などを発明するのが好きだった大西克知は病院で看護師が履く靴も音がしないように黒の毛糸で編んだ靴を考案し看護師にそれ以外の靴を履くのを禁じたと言う（大野 1961 31(4), pp. 267-268）。大学の試験にも工夫が見られる。30 問を試験の 1 か月前に学生に知らせるが全講義から出ているので学生は全講義を勉強しなければいけない。試験当日にその 30 問を 30 本の細い竹棒に書いて竹筒に入れた（竹棒・竹筒全て大西克知自己作製）のを学生の前で 5 回振り 5 問出題し黒板に書いてその中の 4 問を個々の学生に選択回答させるシステムだった（大野 1961 31(3), p. 191）。現代の学生にはそのアイデアは面白い先生として好意的に見られるのではないだろうか。

本稿で参考にした文献の数々には花（園芸）を愛し子供に優しく、病気の恩師・友人・妻・妹を看護する優しい一面を見せている。几帳面な大西克知だが 1 つだけ微笑ましい失敗談があったそうである。大西克知は男子の名前には上は「克」で下の文字は「知」と同じ 8 画の漢字にすると決めていたが、長男「克治」、次男「克和」は順調だったが三男には「克保」と 1 画多い文字を命名したのは男子続出に喜んだあまりの『千慮の一失』だろうか（須田 1932, p. 52）と、この様に大西克知に関する話題が多いのは、人々にとって愛される人物であったように思う。

## 4. 電子展示の公開と展示会の開催

### 4.1. 活動の背景

平成 27 年（2015）は狩野亨吉・大西克知生誕 150 周年にあたり、九州大学でも研究開発室コンテンツ形成班参加職員を中心に様々な活動が展開されたが、その淵源は、平成 24 年に、研究開発室員の中里見敬氏の科研費により、執筆者の一人である山根が鷗外文庫プロジェクトの調査のため東京大学に出張した際、元研究開発室員で東京大学の田村隆氏、天文学史研究の第一人者である中村士氏と会合する機会を得、3 年後の狩野亨吉生誕 150 周年に向けて、全国にある関係資料の調査・広報・顕彰につき情報交換を行ったことに遡る<sup>11</sup>。その後も田村氏には九州大学の狩野文庫顕彰について一方ならぬご支援を賜っており、それに加えて東京大学、東北大学で狩野関係の展示会が開催されるという情報があり、これに連動して、九州大学でも展示会など何かできないかという気運が研究開発室コンテンツ形成班参加職員の中で高まりつつあった。

### 4.2. 電子展示「狩野亨吉と九州大学」

日常業務もある中、職員だけで展示会を構成し、展示パネル、キャプション等を一から作成するのは困難なため、まず、附属図書館の学習ガイド（Cute.Guides）で導入されているサービスである LibGuides を利用して簡易な電子展示を作成し、九州大学の狩野文庫にどのようなものがあるかを紹介することにした。

これまでも附属図書館において、開催された展示会を元にくつか電子展示が作成されているが、一度公開されると基本的に更新することがないため、過去のコンテンツとしてウェブサイト上で埋もれていくことになり、サーバの更新などにより維持が難しくなるという問題が生じていた。LibGuides は、更新が容易であり、契約している限りはページを維持することが保証される。既に九大コレクション「貴重資料」の説明ページでも利用されており、その中の資料解説が電子展示のモデルとなった。

とりあげる資料については、九州大学が狩野亨吉から購入した各分野の図書の中から、狩野の業績や蒐書のあり方が見えやすいもの、内容的に興味深いもの、価値が高いものから選んだ。これらには、既に電子化されているもの、過去の展示会等で解説があるもの、参考文献が充実しているものが多いという見通しがあったため、写真撮影や解説の作成を大幅に省力化することができた。内容については、研究開発室の室員の先生方や、『九州大学百年の宝物』や貴重文物講習会<sup>12</sup>でお世話になった先生方など、各分野の専門家に確認していただき、質の確保に努めた。これまでの研究開

発室における活動で築かれた研究者と図書館職員のネットワークが活かされたものとなっている。



図 6：電子展示「狩野亨吉と九州大学」  
<http://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/kano>

電子展示「狩野亨吉と九州大学」は平成 27 年 10 月 23 日に公開した。公開後も紹介資料を徐々に増やし、調査により新たな事実が判明すればそれも追加した。学習ガイドである Cute.Guides の一つとして公開されることを意識し、関連リンクや参考文献を充実させ、初学者やレファレンスにとっても有用なページを目指した。現在も新たな関連リンクや参考文献が見つければ追加しており、今後も活用し続けられるよう努めている。

### 4.3. 小展示企画「九州大学附属図書館と狩野文庫」

電子展示「狩野亨吉と九州大学」が公開されたことで、医学図書館で小展示企画「九州大学附属図書館と狩野文庫—眼科学教室旧蔵本を中心に—」（2015 年 11 月 26 日～12 月 16 日）の実現に至った。

展示場所は、医学図書館 1 階ロビーとした。展示に利用できるスペースは縦 2m×横 5m の 10 m<sup>2</sup>と限られた広さだったが、入館者の最も目につく場所で行うことを優先した。主にこの空間へ、ホワイトボード 3 枚、展示ケース 1 枚、大型ディスプレイ 1 台、参考文献を展示するための書見台 1 台、アンケート記入、参考文献閲覧のための台付きベンチ 1 台を配置した。

展示物は、①展示パネル、②展示資料、③参考文献コーナー、④古医書画像データの大型ディスプレイ投影の 4 つに分けて準備した。

展示パネルは、前述した電子展示の内容を流用した。他にも新たに、大西克知、狩野亨吉、菅虎雄の年譜、夏目漱石との交友に関する資料、狩野亨吉日記に記載された九大医学部に図書を売却した際の記録資料を作成し、解説資料に追加した。

展示資料は、まず、狩野文庫の中から、狩野の蔵書印が見られるものを選定した。医学図書館の古医書コレクションの目玉である『重訂解体新書銅版全図』もその中の一つである。次に、眼科学に関するものを選定した。江戸時代の眼科の名門である馬島流の秘伝書『馬島眼療之図』、蘭法眼科が流入されるようになった時代の医書『眼科要略』、大西が編纂した『新撰大視力表』というように、ささやかながらも、日本の眼科学発展の流れが分かるように展示した。展示スペースが少なく展示点数が限られたが、多くの人に興味を持ってもらえるよう、できるだけ絵や図の入った視覚に訴える資料を選んだ。

展示資料の点数が少ない代わりに、展示内容を深めるため参考文献コーナーを充実させた。電子展示で参考文献として挙げている関連図書や論文を集め、実際に手に取ることができるようにした。展示会開催期間中は、このコーナーの資料を利用するために、複数回来館するリピーターも見られた。

大型ディスプレイ投影については、過去に本学名誉教授ミヒェル・ヴォルフガング氏によって電子化された古医書画像データを利用した。狩野文庫であると判明したタイトルの中から、『五臓之守護并虫之図』など、貴重かつ楽しんで見ることができそうな資料を選定した。現物を展示した『馬島眼療之図』も電子化されていたため、この画像データも投影するタイトルに含めた。



図 7：小展示企画ポスター



図 8：  
小展示企画「九州大学附属図書館と狩野文庫」  
展示の様子

#### 4.4. 展示企画を終えて

約3週間の開催期間中、閲覧者は計235名となった。そのうち、アンケート回答者は11名であった。アンケートの結果は、展示会全体について、「とてもよい5名、よい5名、まあまあ1名」と悪くない反応であった。しかし、「展示資料が期待していたよりも少なかった」というコメントが見られた。職員自身、準備段階から展示資料が少ないのではないかと危惧していたため、この反省点は今後活かしていきたい。

反省点はあるものの、展示会全体を振り返ってみると、有意義な企画となったと評価できる。特に、大きく以下の3つの点が挙げられる。

##### 1. 九州大学の狩野文庫の存在をアピールすることができた

九州大学、特に眼科教室旧蔵の狩野文庫の存在は、近年まで存在が知られていなかったが、学内外にその存在を顕在化することができた。目録やコレクション情報としては数年前からウェブ上で公開しているが、それだけでは、なかなか知って欲しい人へ情報が届かないことが多い。展示会として情報を発信することで、従来から公開していた情報がさらに知られることになった。

##### 2. 新しい試みができた

ウェブガイド・Cute.Guidesを展示会と連動させるという新しい試みも行うことができた。これまで、展示会の開催後にその内容を電子化するということがあったが、今回はその反対で、電子展示を現実の展示会として実現させた。今後同様の企画を行う際の参考モデルとなり得るだろう。

##### 3. 人とのつながりができた

学内者だけではなく、学外の方々とつながりができたことも展示会の収穫である。アンケートの回答数は少なかったが、閲覧のために来館された、医学部OBの方々、大西家のご親族の方々、研究者の方々等から、このような展示会開催を喜ぶ言葉を直接伺うことができた。今後も、他の展示会開催時には知らせて欲しいという声もいただいている。

##### 4. 職員のスキルアップにつながった

職員自身が調査・準備しながら、興味・知識を深める事ができた。過去の歴史（人物・大学・資料）を記録に残す事ができたため、今後のレファレンスにも役立つと思われる。

この展示会は、たくさんの先行研究と、館を超えた職員同士の協力がなくては実現しなかった。あまり知られていない資料を研究者や世間にアピールしたいが難しい、情報発信をしたいがどこから始めて良いかわからない、という孤独な図書館職員も世の中には多くいるだろう。そんな時は、先行研究を調べることで過去の研究者たちに助けをもらいながら、館内での理解を得、仲間を作り、計画を実現させていくことが大切ではないだろうか。

##### [謝辞]

大西克尚氏におかれましては、「3. 大西克知の生涯」の執筆にあたり御指導いただき、貴重な資料を御貸しいただきました。大学文書館折田悦郎氏におかれましては、大学文書館所蔵の大西克知関係資料の閲覧について格別のご配慮を賜りました。東京大学附属駒場図書館の皆様には、狩野文庫の閲覧について格別のご配慮を賜りました。九州大学所蔵の狩野文庫の調査や電子展示の公開、小企画展示の開催について、附属図書館の皆様をはじめ、下記の研究開発室の室員の皆様や、貴重文物講習会、『九州大学百年の宝物』などでお世話になった皆様に、多くのご指導とご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

大島明秀氏（熊本県立大学）

大淵貴之氏（鹿児島大学）

川平敏文氏（人文科学研究院）

柴田篤氏（九州大学名誉教授）

田村隆氏（東京大学）

中里見敬氏（言語文化研究院）

平岡隆二氏（熊本県立大学）

ミヒェル・ヴォルフガング氏（九州大学名誉教授）

（以上五十音順）

## 参考文献

- [1] 青江舜二郎, 狩野亨吉の生涯, 明治書院, 1974
- [2] 安倍能成編, 狩野亨吉遺文集, 岩波書店, 1958
- [3] 稲田潔, 稲田龍吉とその一族, リブロ・サイエンス, 2006
- [4] 内田孝蔵, “大西先生追悼の辞”, 日本眼科学会雑誌, vol.36, no.10, 附録銀海叢話, pp.46-49, Oct.1932
- [5] 大西克知, 学生近視ノ1予防策, Dec.1897
- [6] 大西克知, “事実: Ju esse”, 福岡医科大学雑誌, vol.1, no.1, 附録, pp.2-6, Jun.1907
- [7] 大西克知, “略字の標準”, 日本眼科学会雑誌, vol.28, no.12, pp.1036-1037, Dec.1924
- [8] 大西克知, “閑話”, 九大医報, vol.1, no.2, pp.87-88, Apr.1927
- [9] 大西克尚, “日本眼科学会の創立と発展”, 日本眼科の歴史, 明治編, 第4章, pp.103-135, Mar.1997
- [10] 大西克尚, “表紙の解説 大西克知”, 眼科, vol.53, no.13, pp.1793-1795, Dec.2011
- [11] 大西克治, “亡父”, 大西克知先生御生誕百年記念誌, pp.43-47, May1966
- [12] 大西克治, “盲目の精神発育に及ぼす影響”, 眼科臨床医報, vol.54, no.8, pp.712-714, Aug.1970
- [13] 大野六郎, “大西克知先生の思い出(上)”, 九大医報, vol.30, no.6, pp.402-405, Feb.1961
- [14] 大野六郎, “大西克知先生の思い出(下)の(一)”, 九大医報, vol.31, no.3, pp.190-192, Aug.1961
- [15] 大野六郎, “大西克知先生の思い出(下)の(二)”, 九大医報, vol.31, no.4, pp.267-271, Oct.1961
- [16] 大淵貴之, 山根泰志, “九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について”, 中国文学論集, vol.40, pp.148-162, Dec.2011
- [17] 越智貞見, “日眼誌の創成期を語る”, 大西克知先生御生誕百年記念誌, pp.5-8, May1966
- [18] 神島文雄, “大西克知先生御生誕百年を記念して”, 九大医報, vol.36, no.3, pp.200-201, Aug.1966
- [19] 九州大学百年の宝物刊行委員会編, 九州大学百年の宝物, 丸善プラネット, 2011
- [20] 久馬一剛, “農学分野日本初の博士は長井新吉か”, 近代日本の創造史, no.11, pp.26-27, 2011
- [21] 久保猪之吉, “追悼の辞”, 日本眼科学会雑誌, vol.36, no.10, 附録銀海叢話, pp.45-46, Oct.1932.
- [22] 吳建先生生誕百年記念会編, “眼の寿命”, 吳建, pp.71-73, Oct.1982
- [23] 河本重次郎, “追悼の辞”, 日本眼科学会雑誌, vol.36, no.10, 附録銀海叢話, pp.49-50, Oct.1932
- [24] 河本重次郎, “眼科小言”, 日本眼科学会雑誌, vol.36, no.12, 附録銀海叢話, pp.63-66, Dec.1932
- [25] 白井順, 前間恭作の学問と生涯, 風響社, 2015
- [26] 須田卓爾, “大西君の回顧”, 日本眼科学会雑誌, vol.36, no.11, 附録銀海叢話, pp.51-52, Nov.1932
- [27] 青年図書館員聯盟, 図書館研究: 青年図書館員聯盟機関誌, 総索引, 第3号, 1944
- [28] 田中鉄三, “九大図書館より”, 書物礼讃, vol.7, 杉田大学堂書店, p.27, Nov.1927
- [29] 田中鉄三, “図書館学参考書展覧会目録に就て”, 図書館学参考書展覧会目録, 九州帝国大学附属図書館, 1928
- [30] 谷原秀信, “表紙の解説 日本眼科学会の創立: 大西克知の奮闘”, 眼科, vol.55, no.10, pp.1095-1100, Oct.2013
- [31] 田原達也, “先生を懐かしんで”, 大西克知先生御生誕百年記念誌, pp.24-27, May1966
- [32] 田村隆, “狩野亨吉生誕 150 周年”, きゅうと NEWSLETTER, vol.10, no.4, 2016
- [33] 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館編, 狩野亨吉生誕 150 周年記念展: 教育者・蒐書家・鑑定人, 2015
- [34] 中島實, “満鮮に於ける大西先生の佛”, 日本眼科学会雑誌, vol.36, no.11, 附録銀海叢話, pp.59-61, Nov.1932
- [35] 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編, “眼科学雑誌の創刊と変遷”, 日本眼科学会百周年記念誌, 第2巻, 日本眼科の歴史, 大正・昭和(前)篇, pp.179-191, Mar.1997
- [36] 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編, “初代, 大西克知教授時代”, 日本眼科学会百周年記念誌, 第4巻, 大学眼科の歴史, p.259, Mar.1997
- [37] 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編, “九州大学医学部眼科学講座 初代教授: 大西克知の時代”, 日本眼科学会百周年記念誌, 第4巻, 大学眼科の歴史, p.288, Mar.1997
- [38] 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編, “大西克知”, 日本眼科学会百周年記念誌, 第5巻, 日本眼科を支えた明治の人々, pp.314-316, Mar.1997
- [39] 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編, 日本眼科学会百周年記念誌, 第6巻, 日本眼科の史料, Mar.1997
- [40] 原武哲, 夏目漱石と菅虎雄, 教育出版センター, Dec.1983
- [41] 福岡日日新聞社, “本日葬儀を行ふ眼科の権威大西博士”, 福岡日日新聞, 昭和7年9月22日, 1932
- [42] 前間恭作, 朝鮮の板本, 松浦書店, 1937
- [43] 宮入慶之助, “大西君の思出”, 実地医科と臨床, vol.9, no.10, Oct.1932
- [44] 村上康子, 東北大学附属図書館展示 WG, “誌上展示会「狩野文庫の世界～狩野亨吉と愛蔵書」—狩野亨吉生誕 150 周年記念企画展—”, 東北大学附属図書館調査研究室年報, vol.3, pp.85-124, Mar.2016
- [45] 山川幸雄, “古医書について”, 医学図書館, vol.19 no.3, pp.253-259, Sept.1972
- [46] 山根泰志, “忘れられた文庫たち: 中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群”, 九州大学附属図書館研究開発室年報, 2008/2009, pp.27-30, Jul.2008
- [47] 山根泰志, “九州大学附属図書館所蔵「近藤文庫」について”, 中国哲学論集, vol.35, pp.55-68, Dec.2009

## 注釈

1 平成 28 年 (2016) 4 月の熊本地震で被害を受けた夏目漱石内坪井旧居は, 実は狩野が第五高等学校時代に住んでいた旧居でもある。狩野が第一高等学校校長に転出した後, 明治 31 年 (1898) 7 月に漱石が転居した (原武 1983)。

2 九州大学において, 「狩野文庫」と称されたコレクションは, 中央図書館の狩野文庫のみだが, 本稿では便宜的に狩野より購入した図書全般を「狩野文庫」と総称することとする。

3 「前略吉沢先生の「明治に於ける京都出版書目」から思いついたのですが九大にある狩野文庫のなかに「戊申以来新刻書目便覧」と云ふのがあつて明治元年から六年迄の間に東京で出版された書物を分類して記載してあり梅巖堂太田勘右衛門と云ふ本屋が出版したもので一寸珍しいものじゃないかと思ふのですが終りには其当時の東京の書物問屋姓名記などもあします。九十八枚許りのものです。

**狩野文庫には古い書目類が沢山ありますのでそれな整理して「版本書籍目録年表」とでもして近日発表したいと思ひます。** 其他九州へ来て以来のものとして「方言研究書目」を作りましたので出来次第送ります。云々 (田中 1927)

4 「一, 「図書目録」の和漢書は大部分狩野亨吉氏の旧蔵本で目下狩野文庫として本館に所蔵しているもので寛文から明治に至る近代順に排列した」 (田中 1928)

なお, 『図書館学参考書展覧会目録』は, 九州大学には所蔵が確認されておらず, 国立国会図書館デジタルコレクションで国立国会

図書館所蔵本が公開されているが、「図書館学参考書展覧会目録に就て」の頁を欠いている。

5 「狩野は稀代の古書収集癖を持っており、収入の大半を古書購入に投入し、大正元年より東北大学などに寄付している。九州大学には大正十一年ごろより、凶書を譲渡している。青江舜二郎氏の調査によると、現在、九州大学図書館ではそれに関する資料・記録は一切存在しない由であるが、かつて当時の九州大学文学部今井源衛教授（国文学）にお聞きしたところ、**東北大学の「狩野文庫」のように、まとまっではないが、「狩野」の印のある凶書が九州大学図書館にたしかに在庫している**、とのお話であった」（原武 1983）

6 「九大工学部理科教室に蒐集された名著珍書 日本長暦宣明曆等を始め和漢の珍書千五百冊集る ◇…桑木博士の談

九大工学部理科教室には教授桑木或雄博士の努力に依つて斯界の名著珍書が蒐集され数学物理天文などの得難い和洋の凶書が蔵されてゐるが此の度更に日本と支那の古書約千五百冊を手に入るゝことゝなり既に同教室に到着すみとなつた**此の貴重書籍は東京の文学博士狩野亨吉氏が多年蔵書してゐたものを売払ふことゝなりその一部分を戸畑錬物会社の重役鮎川義介氏の寄贈によって理科教室の蔵書となつたものであるが千五百冊の古書は孰れも数学、物理、天文**に関した得難い日本と支那の書籍で価格千五百円内外に相当するさうである此の古書の中就中珍重さるべきは我が国の暦の初まりともいふべき「日本長暦」「宣明曆等」の古暦に關孝和等の「和算書」志築忠雄帆足萬里等の天文学及物理書等でこれまで新に手に入れ難い斯界の珍書とされてゐたもので此の外にも幾多の珍書名籍が加へられてゐるのは素よりである、桑木博士は語る

何れの科学にしてもその文献の貴重なるは云ふまでもないが数学天文学の如きその歴史的研究には何といつても古書の参考を最も肝要とする私の教室ではそれまで多少努力してこれらの文献を蒐集してゐるが此の度手に入れた古書の如き一括して千四百冊を得ることが出来たので又とない事であると喜んでゐる、**狩野博士は有名な蔵書家で今回売払つた蔵書のみで五万円に達してゐるといふが此の中東大が七八万円の文学古書を手に入れたがあの震災に焼かれてゐはしないかと思つている**、元來何れの方面でもその文献を歴史的に遡ると誠に貴いものとして容易に得られないものである殊に数物天文の如きその学者なり研究者なりが歎くその著述の如き至つて稀であつたのであるから却々手に入らないのであるが此の度の古書の如き鮎川氏の好意に依つて一括して九大の手に入ることとなつたのである」（『福岡日日新聞』大正12年9月29日）

7 大野六郎（大西門下・娘婿）の回想「図書館は赤煉瓦造りで是等の建築とは別に少しはなれて建てられた。火の用心の為に渡り廊下で連絡せられて居る。吾々はこれを図書館とは呼ばず、旧來通り図書室と呼んで居た。眼科としては大きさに於ても日本一であろう。質に於ては前述の通りである。新図書室は階上に現代文献があり、階下に古書がある。**古書は京大狩野学長の全蒐集を買取つたもので、和漢の眼科古書、其他の珍書が堆積されて居る**。狩野学長は有名な蔵書家で、人格者で鳴って居た。先生の好きそうな人物である。是等の凶書を一見すると先生の偉さ加減が、計り知れる様な、また計り知れない様な感に打たれる」（大野 1961 31(3), pp.190-191）山川幸雄（元医学図書館職員）の遺族への聞き取り「大西コレクションを書くにあたって、筆者が幸運と思つたことは、教授の遺族が当市内に在住されていることだった。必要とあればいつでも直接訪ねることができるからである。殊に2代克保博士（九大昭9卒。耳鼻咽喉科開業医）は趣味の共通から筆者は月に1〜2度は顔を合せ。・・・（中略）・・・ところで筆者は大西コレクションの源流や背景が知りたく、克保博士に出会つた時尋ね、また一度は直接自宅を訪ね判つたことは、**大西コレクションの蔭の協力者として、菅虎雄（1864〜1943）教授の名を書き洩してはならぬことだった**。・・・（中略）・・・この在清時代の菅教授が大西教授が古医書類の蒐集を依頼された。大西コレクションの源流の一つがここから始まっていた。国内発行でない漢籍本の多い理由がうなずけた」（山川 1972）

『九州帝国大学医学部附属医院眼科図書原簿』（和書雑誌）によれば、眼科教室が菅虎雄の在清時代（1903〜1906）に古医書類を蒐集した事実はない。大西個人の蔵本として菅に依頼したのでなければ、狩野の存在が遺族に伝えられていなかったことで生じた誤伝ではないかと思われる。

8 稲田潔，“大西克知・I（宇山安夫，資料1より引用）”（稲田

2006）

※昭和41年2月12日大阪朝日天声人語からの引用

9 宮入慶之助も平成27年に狩野亨吉と大西克知と同じ生誕150周年を迎え生誕地の長野市松代町から千曲川を隔てた長野市篠ノ井に位置する「宮入慶之助記念館」では平成28年6月に祝賀イベントを行った。同記念館はNPO法人で昭和54年に設立された。  
<http://miyairikinenkan.com/>

10 長井新吉（1859-1905）は四国徳島出身、明治13年（1880）にドイツ留学を命ぜられハレ大学で農学を修め、明治19年に同大学で博士の学位を取得した。同博士論文は富山大学ヴィーザー文庫等で所蔵している。

“ヴィーザー文庫所蔵の日本人著作”

[http://www3.u-toyama.ac.jp/dsec/kosho/WieserBibliothek\(JpAu\).pdf](http://www3.u-toyama.ac.jp/dsec/kosho/WieserBibliothek(JpAu).pdf)  
(久馬 2011)

11 なお、この時の会合を背景として、平成27年11月3日に「狩野亨吉の書物」研究会が東京大学駒場キャンパスで開催された（田村 2016）。

12 貴重文物講習会は、キャンパス移転に向けて、九州大学に所蔵される貴重文物への認識を深めるために、図書館職員向けに2007年10月から2011年3月まで全42回開催されたもので、『九州大学百年の宝物』は、その貴重文物講習会を元に、九州大学が創立百周年を迎えるのを記念して刊行された凶書。

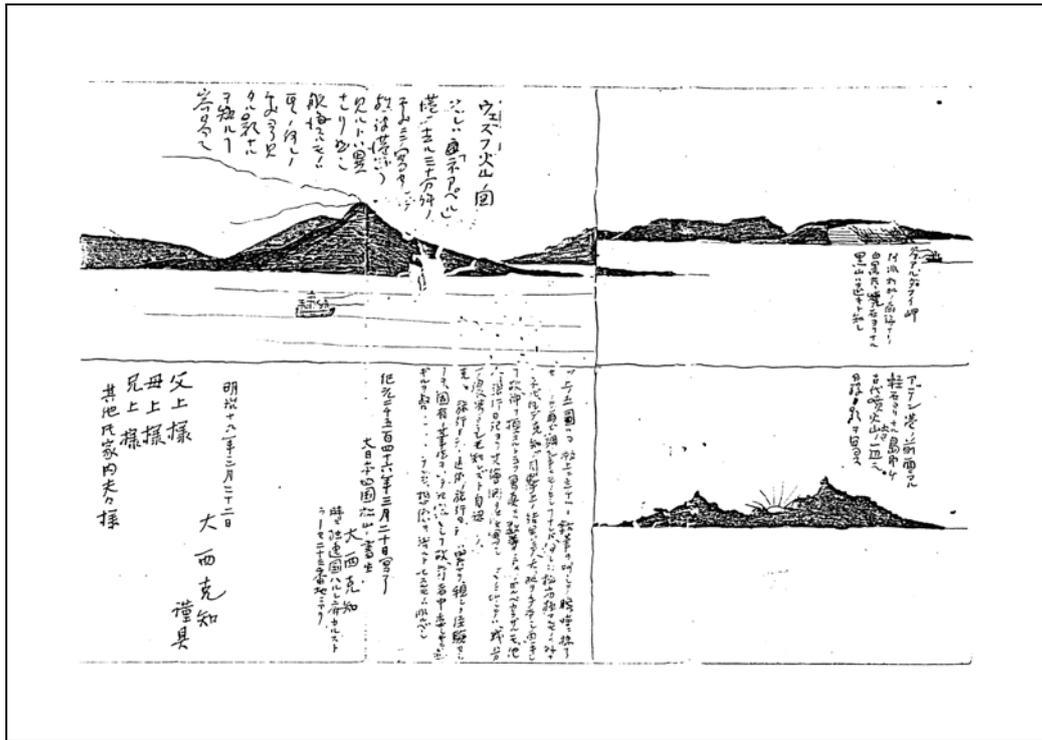


図9：航海日記（大西克尚氏所蔵）

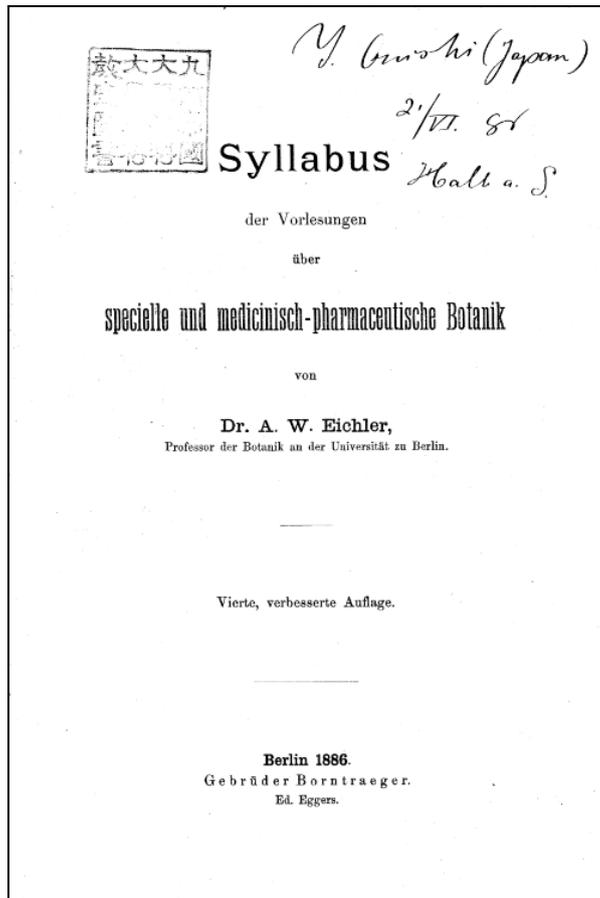


図10：大西克知旧蔵書 アウグスト・アイヒラー 『薬用植物学提要』 1886年（九州大学医学図書館所蔵）  
大西克知がドイツに到着して4ヶ月目にハレで購入したと推測される

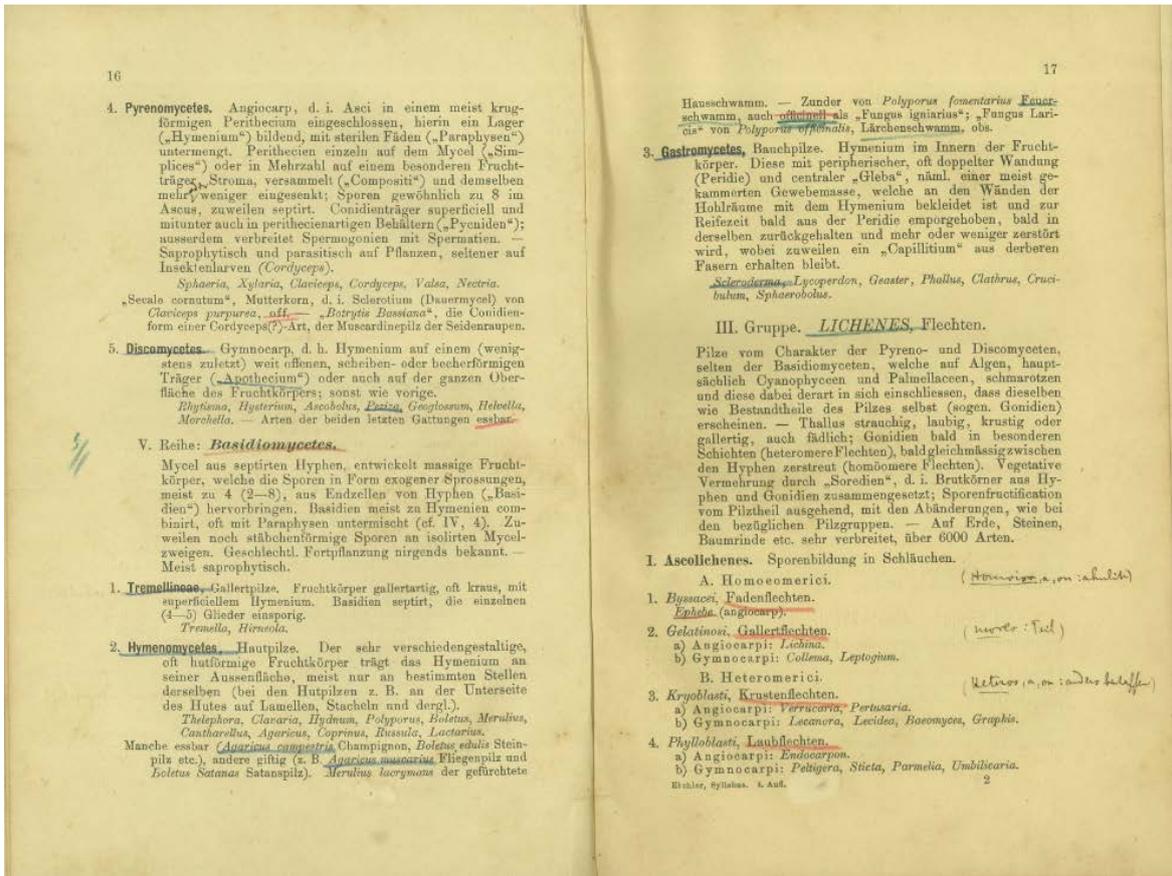


図 11 : 「図 10」を開くと多くの頁に書き込みがある

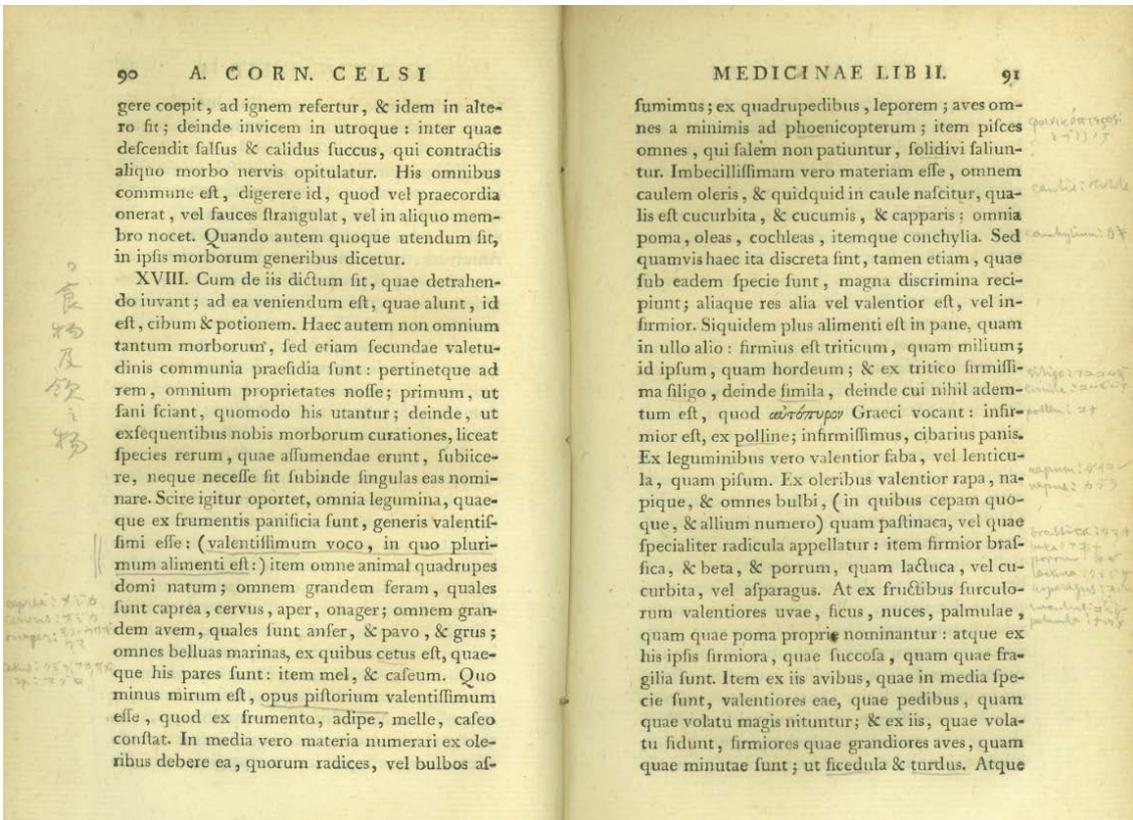


図 12 : 大西克知旧蔵書 ケルスス 『医学論』 1806年 第2巻 第18章 食物や飲み物について  
大西克知がドイツ留学時にハレで購入したと推測される。章の見出しを日本語で補記している。